慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ダーウィン・ケルシイ編 新国家における農業, 1790年-1840年のアメリカ農業
Sub Title	Darwin P. Kelsey, ed. Farming in the new nation : interpreting American agriculture, 1790-1840
Author	岡田, 泰男
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1974
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.67, No.11 (1974. 11) ,p.1160(66)- 1162(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19741101-0066
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19741101-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」67巻11号（1974年11月）

書　評

ダーウィン・ケルシイ編『新国家における農業，1790年—1840年のアメリカ農業』

アメリカ経済史の研究において，独立後半世紀の時期がきわめて興味深いことは，多くの人々の認めるところであろう。もちろん，植民地時代も重要ではあるが，独立後の半世紀間こそが，アメリカ国民経済の特質を決定したと考えられるからである。ところで，かかる伝統的関心と並び，まったく別の面からも，この50年間は関心を集めている。すなわち，最近流行の計量的研究の立場からすると，1840年以前は Dark Ages なのであって，人口を除くと，経済活動に関するセンサスが存在しないのである。したがって，ある経済史家などは，アメリカの経済成長についての概説を，1840年以前と以後という2つの時期に区分しているほどである。(Davis, Easterlin, Parker, et al., *American Economic Growth*, 1972. におさめられた Robert Gallman の論文を見よ。)

この時期のアメリカは，いうまでもなく農業国である。しかし，北部においては，工業化，都市化の開始にともなって農業にも変化が生じつつあったし，南部においては綿花王国が生まれた。したがって，農業史という観点からも，独立後の半世紀間は重要なのであるが，研究史的に見ると，必ずしも十分に研究されているとはいい難い。したがって，1790年から1840年にいたるアメリカ農業を主題とするシンポジウムは，大いに注目を集めたのであった。このシンポジウムは，マサチューセッツ州スターブリッジにあるオールド・スターブリッジ・ヴィレジ (Old Sturbridge Village) で開催されたが，その際に発表された論文12編とコメント9編を収録したのが本書である。もっとも，元来は，この集会のスポンサーでもあるアメリカ農業史学会の機関誌 *Agricultural History* の1972年1月号に掲載されたものであるが，それに索引を付し，あらためて単行本として刊行されたものである。

このシンポジウムは，アメリカ農業史学会に加え，オールド・スターブリッジ・ヴィレジ，スミソニアン博物館，アメリカ農務省が共催して開かれた。オールド・スターブリッジ・ヴィレジというのは，一種の明治村であって，19世紀初頭のニュー・イングランドの生活を再現した野外歴史博物館である。ここには，プリニイ・フリーマン農場 (Pliny Freeman Farm) と呼ばれる「歴史農場」があり，19世紀初頭の農具と農法により，実際に農業が営まれている。したがって，シンポジウムには，研究史の回顧と展望，農業における科学と技術，農業の変化，というセッションに加えて，博物館と農業史という部会もおかれた。いささか本書の主題からはずれたような博物館についての論文が含まれているのは，上記の事情によるものである。

研究史の回顧と展望にあたっては，まず，ビドウェル，ファルコナー共著の『北部農業史』(Bidwell and Falconer, *History of Agriculture in the Northern United States, 1620—1860*) とグレイの大著『南部農業史』(Lewis C. Gray, *History of Agriculture in the Southern United States to 1860*) という2つの古典の今日における意義が評価され，次いで現在の研究課題が示されている。ウエイン・ラースムッセン (Wayne D. Rasmussen) は，ビドウェル，ファルコナーの書物および，その後になされた重要な業績を紹介し，とくに1790—1840年の部分について次のように指摘する。すなわち，ビドウェルが，自給的農業から商業的農業への転換を論じたこと，また西部における商業的農業の発展が，南部の綿花生産拡大と東部の工業発展を可能ならしめたと述べたことが重要であり，その後の研究と深いつながりを有している。ビドウェルとファルコナーは，今日の農業史家，経済史家にとって貴重な先駆者であった。

次に，ジョン・ムーア (John H. Moore) は，グレイの書物が歴史家の間でどう評価されてきたかを論ずる。ムーアによれば，グレイの著書が刊行されたのは，かのフィリップス (Ulrich B. Phillips) の名声が頂点にあった時期であり，それがグレイにとって不運であったという。南部史研究についてのフィリップスの影響は著しく大きかったので，1930，40年代にはグレイの書物はほとんど無視され，ようやく1950年代に入ってから，スタンプ (Kenneth Stampp) やジェノヴィーズ (Eugene D. Genovese) によって再評価された。そして，今日では，もっとも基本的文献のひとつとしての地位を確立している。なお，ニール・マクノール (Neil A. McNall) は，ラースムッセンとムーアの論文にコメントを加え，『北部農業史』と『南部農業史』とを比較すれば，後者の水準の方が高いという。さらに，地域史という点では，その他の場合にも南部の研究の方が進んでおり，例えば10巻からなる南部史 (*History of the South*) に比較しうるような北部史は存在しない。

その理由は，マクノールによれば，南部が地域的特殊性という問題を意識せざるをえなかったのに対して，北部にはその必要がなかったからであった。

「農業史の諸問題」という論文で，ポール・ゲイツ (Paul W. Gates) は，農民の農業外所得，金融および抵当，小作制，農場放棄，ニュー・イングランド・タウンの土地問題，農業技術の伝播，兼業農家等々の問題にふれている。これらの多くは，今後もっと研究されねばならぬ問題としてあげられているのであるが，主に北部を中心としている。もちろん，これはゲイツの関心が北部に向けられていることにもよるが，前記マクノールの述べた如き事情が，北部農業史の研究をおくらせているということもあろう。なお，ゲイツの指摘する問題の少なからぬ部分が，わが国の経済史家のいわゆる「農民層分解」に関連していることは興味深い。アメリカにおいて，こうした領域が無視されてきたことが，わが国における北部農業史研究未発達の一要因であることは明らかであろう。ゲイツの論文には，ヴィヴィアン・ワイザー (Vivian Wiser) とロバート・アンクリ (Robert E. Ankli) がコメントを付している。ワイザーは史料の問題，アンクリは，ゲイツの論文がミクロ的であるとすれば，マクロ的な面を扱っている。最初にふれた如く，1840年以前には農業センサスは存在しないのであるが，それ以前の数字を推計するにあたっての諸問題をアンクリは述べている。なお，この点は後のゴールマンの論文で詳細に論じられている。

農業における科学と技術というセッションでは，農作物についてのラルフ・シングルトン (W. Ralph Singleton) の論文と，農機具についてのクラレンス・ダンホフ (Clarence H. Danhof) の論文が発表され，キャロル・パーセル (Carroll W. Pursell, Jr.) のコメントが付された。シングルトンによれば，1790年—1840年の時期における農作物は，植民地時代とほとんど変らないという。一方，ダンホフは，この時期に農機具の分野では大きな変化がみられたとして，綿繰機，脱穀機，すき，等の例をあげている。農作物と農機具との対照的な発展の原因は興味深いが，それについては十分究明されていない。もちろん，メンデル法則の発見には，まだ四半世紀が必要なのであるから，1840年の段階で科学的な品種改良を期待する方が無理というものであろう。なお，技術という面からすれば，単に，農作物や農機具についての論文よりは，土地利用の方法，すなわち輪作や施肥についての論文がほしいところであるが，ここにはおさめられていない。

農業史と博物館については，ジョン・シュレイベッカー (John T. Schlebecker)，ダーウィン・ケルシイ (Darwin P. Kelsey) の論文と，ジェイムズ・ショート (James R. Short) のコメントがおさめられている。ここには，さまざまな問題がとりあげられているが，われわれの興味をひくのは，文書以外の資料の価値という問題であろう。とくに技術史にとっては，百の文書よりもひとつの遺物という事態もありうる。しかし，文書以外の資料はそれ以上のことをも教えてくれる。たとえば，農機具は，単に当時の技術水準や使用方法についてのみならず，原料や製品の流通，所有者の経済状態などについても物語ってくれる。また，オールド・スターブリッジ・ヴィレジにおいて，実際に19世紀初頭の農村生活を再現しようとした際，いかに自給しえない品物が多かったか，というような点が興味をひく。さらに，当時作られていたような作物や飼育されていたような家畜を，いわば遡及的品種改良によって作り出す話が述べられているが，かかる実験が成功すれば，当時の収穫量等についての知識が増すことであろう。

次に，農業の変化については，歴史，地理，経済と多方面から分析が加えられている。まず，チェスター・デストラー (Chester M. Destler) が，「ジェントルマン・ファーマーと新農業」という題で，ワズワース (Jeremiah Wadsworth) の例をとりあげている。ワズワースは，イギリスの農業革命に興味を持ち，アーサー・ヤングの著書を購入したり，優秀な家畜や，新種の小麦を輸入したりした人物であるが，18世紀末から19世紀初頭のアメリカにおいて，かかる農業改良家がいかなる影響を有したかは興味深い問題である。初期の農業協会，とくにエルカナ・ワトスン (Elkanah Watson) とバークシャー農業協会 (Berkshire Agricultural Society) の名前などは良く知られているが，個々の農業改良家や，彼等をとりまく社会経済的状況などは，あまり研究されていないのであって，デストラーのような研究が他にもなされることが望まれる。

アンドリュウ・クラーク (Andrew H. Clark) は地理学者であるが，その「農業変化の地理的研究」という論文は極めて示唆に富んでいる。彼はビドウェル以来の自給的農業という概念をとりあげ，ある地域が自給的であるか否かを，その地域からの農産物輸出量の大小で判断する通常の方法を批判する。なぜならば，輸出量はゼロであっても地域内取引は存在しうるからで，

19世紀初期のアレガニ以西のフロンティアについても，一概に自給的とはいえないと述べる。そして，農村における手工業者，商人，その他の非農業人口の存在，さらに彼等による農業生産についても注意をうながしている。とくに彼が，きめのこまかさ(fineness of grain)を重視する点は，最近のアメリカの経済史家にとって極めて適切な忠告となっている。彼は自給的云々について，州単位の数字はほとんど意味を持たぬことを述べ，南部全体として食料が不足していたなどといっても役に立たぬこと，地域内での過不足や取引のあり方が重要であることを指摘する。なお，ロジャー・パークス(Roger N. Parks)のコメントも，こうした点について，クラークの論文を高く評価しているが，本書の主題となっている時代については，やはり自給的農業から商業的農業への転換が中心問題であろうと記している。

「農業の変化を計る」というセッションでは3名の経済学者，ウィリアム・パーカー(William N. Parker)，ロバート・ゴールマン(Robert E. Gallman)，スチュアート・ブルーシイ(Stuart Bruchey)の論文が発表され，スタンリー・リバーゴット(Stanley Lebergott)のコメントが付された。変化を計る，といっても，いわゆる計量的な研究はゴールマンのものだけであって，あとの2論文は表もなければ式もない良き昔をしのばせるものである。さて，ゴールマンの論文は，本来1840年以前の農業生産性の推計を目的としたものであるが，1840年以後との比較という必要を満すため19世紀全般にわたる投入産出量および生産性の推計をおこなっている。そして，農業生産の成長率，生産性の成長率のいずれに関しても，1840年以前の方が，それ以後1900年までの数字よりも高いという結論を出している。なお，資料についても細かい説明があるが，例のプロジェットの数学(Samuel Blodget, *Economica*, 1806)に頼りすぎている点が少々気がかりである。もっともゴールマン自身，ここでの推計は試算的なものであると述べている。

パーカーの論文は，とうもろこしの収穫方法が地域により異なることをとりあげ，その経済的理由を探っている。農作業の方法などについては，文化的社会的要因も強く働くので，純粋に経済的分析はできないし，計量化も不可能であると，いくぶん弱気なことを書いているが，これはパーカーの本音であるのか，シンポジウム出席者への気がねもしくはお世辞であるのか良く解らない。ブルーシイの論文は，流通機構の効率化を論じたものであり，「分業は市場の広さによって制限される」という言葉をひいて，分業の進展が効率を上昇せしめたことを述べている。しかし，リバーゴットのコメントにもあるように，機能の分化が常に効率を上昇させたか否かについては疑問も残る。

以上，本書におさめられた論文は，いずれも興味深いものであり，また個々の論文としては明快である。ただ，本書全体のテーマという点では，読後にはっきりした結論を得ることはできなかった。独立後半世紀が重要な時代であることは認めるとしても，1790年—1840年という50年間が，アメリカ農業史において，特別なまとまりを持つ時期であるか否かは疑問である。キャロル・パーセルは，この半世紀間こそ，アメリカの技術が中世的なものから近代的なものへ変化した時期だと述べているが，1840年が良い区切りになるかどうか，ダンホフの論文からは別の結論も下せそうである。さらに，ゲイツのように視野を広げた場合には，1840年以降とのつながりはもっと強くなる。たしかに，ビドウエルは，この時期を自給的から商業的農業への転換期として把えようとしたが，クラークやパークスは，ビドウエルの概念構成に疑問を呈している。また，南部に関しては，ビドウエルの見解は当然あてはまらない。こうしてみると，1790年—1840年が，時期区分として，どこまで有効であるか，シンポジウムとして一致した結論はでていないということになろう。もっとも，こうしたことは本書の価値を減ずるものではないことを記しておきたい。

〔Darwin P. Kelsey, Ed. Farming in the New Nation: Interpreting American Agriculture, 1790—1840. Washington, The Agricultural History Society, 1972, 239 pp. 1,850円〕

岡田泰男（経済学部助教授）

The Development of Concept of Labour by Karl Marx

by Hiroyuki Noji

The object of this paper is to obtain some idea on the course of development of Karl Marx from philosopher to political economist. In this study consideration will be mainly fixed on "The Manuscript of Paris" (1844) and "The German Ideology" (1845-1846).

(1) To young Marx "labour" is the most essential element of human beings, and this labour must be understood as cooperative labour of all men, not as isolated activity of isolated person like Robinson Crusoe. Men must cooperate to reproduce himself as Man, and this cooperation or cooperative labour formed himself into mankind. We will be able to consider this basic proposition of Marx to be valid to any stage or period of human history including the capitalist society of today.

(2) In "The Manuscript of Paris" the conception of "alienation" lies as its fundamental method of analysis. The alienation means solution or disintegration of original unity of human cooperative labour, that is, ((1)) dissolution of unity of men, ((2)) separation of products of labour from the labourers, ((3)) inev itableresult of these, that is, loss of active or creative character from the labour of Man. Marx says that in the bourgeois society Man is driven into the state of "alienation".

(3) If we can discriminate form of a theory from its content, we will be able to say as follows; in the Marx's theory of alienation, its form which succeeds the Hegelian dialectic formulated exclusively for the process of thinking falls into contradiction with its content "labour". The content will be forced to establish its adequate form.

(4) Thus we find in "The German Ideology" a form fitting to its content, the concept of "labour". The method of alienation is replaced by that of history of human cooperation. The driving force of this human history is "division of labour" which Adam Smith explained as the cause of wealth of nations.

Thus starting from a philosophical idea of cooperation, or unity of human labour, or community of labour as the essentials of human beings, we have arrived now at the economic idea of "division of labour".

The idea of division of labour, most fundamental of political economy, gave to Marx three implications, (1) the driving force of history, (2) an autonomous order which men can not control at their own will, but men are controled by it, (3) the critique of German idealism; when the function of thinking of men differentiates itself from the totality of human activities by